

「2つの思考様式」の射程

横山 草介

The scope of “two modes of thought”

Sosuke Yokoyama

要旨：

本稿の目的は「質的」な研究と「量的」な研究とを対立的に位置づけて理解しようとする言説や、研究成果の評価に際して一方の評価基準を他方の評価基準にそのまま適用しようとして研究の真価を見誤ったりするような事例の今日的な状況に対し、思考様式の違いに留意しつつも、物事の深い理解に向けて双方を相補的に活用していくための方法論について検討を行うことにある。この主題に関わる論考として本稿ではJ. S. Brunerによる「2つの思考様式」の区別と、見田宗介による質的なデータと数量的なデータの分析にかかる「多段式の分析」の提案とを重ねて検討する。本稿の論究を通して異なる思考様式を対立的に位置づけたり、それぞれの立場に安住したりするのではなく、両者を建設的に組み合わせて物事のより深い理解を目指すための方法論上の示唆を得ることができた。

キーワード：

2つの思考様式 多段式の分析 質的研究 量的研究 方法論

1. 問題と目的

“then”という副詞の意味上の機能は、“if A then B”という論理式の文脈で使用される場合と、例えば“king dead, and then queen dead”といった物語の文脈で使用される場合とでは異なっている。論理式の文脈において“then”という副詞は、読者に対してAという条件とBという帰結との間に矛盾のない一貫した法則性があることを暗示している。他方、物語の文脈において“then”という副詞は、読者に対してAという出来事とBという出来事との間には複数の文脈が想定可能であることを示している。端的に言って、論理式の文脈は多義性を退け一義性を志向するのに対し、物語の文脈は一義性に縛られることなく多義性を引き受ける。

このように“then”という副詞の意味上の機能を一例に、論理式が引き出す思考様式と物語が引き出す思考様式とが異なっていることを指摘したのがJerome Brunerであった(Bruner, 1985, 1986)。

Bruner (1985, 1986) による「2つの思考様式」の区別と彼の忠言に従うならば、物語の思考様式で理解されていることを論理式の思考様式に還元しようとしたたり、論理式の思考様式で理解されていることを物語の思考様式に還元しようとしたりすることは、両者が元来置かれていたコンテキストのもとで発揮し得ていた各々の思考様式の強みや利点を損なうことになりかねない。したがって、両者は対立的に位置づけたり、一方を他方に還元しようとしたりするべき関係にあるのではなく、それぞれに異なる思

考様式として相補的に物事の理解に役立っていると考えなければならない。

だが、Bruner (1985, 1986) のこうした忠言にも関わらず、アカデミックな領域においては例えば研究のデータや分析の扱いにおいて「質的 (Qualitative)」な研究と「量的 (Quantitative)」な研究とを対立的に位置づけて理解しようとする言説や、研究成果の評価に際して一方の評価基準を他方の評価基準にそのまま適用しようとして研究の真価を見誤ったりするような事例は未だに存在する。そこで本稿では Bruner (1985, 1986) の「2つの思考様式」の論考を足掛かりとしながら、思考様式の違いに留意しつつも物事の深い理解に至るために双方を相補的に活用していくための方法論について検討をすすめる。

2. 2つの思考様式

「2つの思考様式 (Two modes of thought)」という論題は、1984年8月25日にカナダのトロントで開催されたアメリカ心理学会の第一分科会における招待講演として Bruner が提供したものである。もともとの演題は「思考のナラティブ様式とパラダイム様式 (narrative and paradigmatic modes of thought)」であった。この講演のなかで Bruner は、2つの思考様式はまったく異なる機能原理と真理についての考え方を持っており、それらは相互に他方に還元することができないと主張した (Bruner, 1985, 1986; 横山, 2019)。

認知機能、思考には2つの様式がある。それぞれは経験をまとめあげ、現実を構成するにあたって、まったく異なる方法を提供する。2つは (相補的ではあるが) 相互に

に還元され得ない。一方の様式を他方の様式に還元しようとしたり、一方を他方から引き出されたものとして貶めて扱うような試みは、必然的に思考の豊かな多様性を捉え損ねることになる。

(Bruner, 1986, p. 11)

以上の書き出しに続いて Bruner は2つの思考様式をそれぞれ「思考の論理-科学的様式 (logico-scientific mode)」と「思考の物語様式 (narrative mode)」として特徴づけている (Bruner, 1986)。以下、それぞれの思考様式について確認していこう。

Bruner (1985, 1986) に基づけば、思考の論理-科学的様式が機能するフィールドの例が数学や物理学の領域である。数学においては、ある仮説や命題を証明するための高度に体系だった手続きが確立しており、それらの手続きを駆使しつつ、特定の対象間に潜在する関係のメカニズムを高次の抽象化をとめないながら明らかにしていくことが目指される。他方、物理学においては、特定の経験的事実の入念な観察から出発し、当の現象の背後に潜在する普遍的な法則の存在を仮説づけ、その上で当の仮説を検証するための周到な実験手続きが組まれる。数学においても物理学においても、ある命題や仮説の証明や、特定の現象の背後に潜在する普遍的な法則を明らかにするための手続きにおいては、その手続きの精密性、一貫性、無矛盾性が重視される。そして一連の手続きを経て得られる何かしらの知見は、個別の状況に左右されることのない普遍的な法則、理論、モデルとして成り立つことが期待される。Bruner (1985, 1986) の言葉を借りて言えば、思考の論理-科学的様式は、文脈独立的に成り立つ普遍的な真理 (truth) の解明に向かっている。

他方、思考の物語様式が機能するフィールドは、上記とはまったく異なるものである。Bruner (1985, 1986) に基づけば、思考の物語様式が機能するフィールドの例が詩や文学の世界である。これらのフィールドは、特定の世界のもとに住まう人間や行為主体の多種多様な生のあり方や心の有り様を理解することを目指す。人間の生や心の多種多様な有り様の理解を目指す思考の物語様式のもとでは、思考の論理-科学的様式が重視する一貫性や無矛盾性の重視は、ときとしてことの真実味に疑念を抱かせるものとなる。というのも、思考の物語様式のもとでは矛盾や葛藤、一貫性の破綻がともなわれることが、むしろ人間の生や心のリアリティを浮き彫りにするものとして解釈されるからである。裏返して言えば、思考の物語様式のもとでは、一貫性や無矛盾性はことの真実味を損なうものとして扱われかねないのである。詩や文学作品を通して得られる何かしらの知見は、その読者を、特定の世界のもとに住まい、自らの生活世界の影響を否応なく被りながら生きる存在としての人間の生や心の有り様の理解に導くことが期待される。Bruner (1985, 1986) の言葉を借りて言えば、思考の物語様式は文脈依存的に成り立つ個別具体的な事象の真実味 (truth-likeness) の探求に向かっている。

以上に明らかのように「思考の論理-科学的様式」と「思考の物語様式」とは、まったく異なる機能原理と真理についての考え方を有している。Bruner (1985, 1986) の主張を敷衍して整理しておくならば、一方は高度に形式立った証明手続きや周到な観察と実験に裏づけられた証拠に基づいて、物事の背後に潜在する文脈独立的に普遍の「真理 (truth)」の解明に取り組む。他方は、多様なレトリックや表現手法を駆使しつつ、文脈依存的で個別具体的な事象の

「真実味 (truth-likeness or verisimilitude)」を立ち上げることを通して、人間の生や心の多種多様な有り様の理解に取り組む。

さて、ここで2つの思考様式の区別とその特徴とをBrunerの引用をもって裏づけておこう。以下の引用部でBrunerは「思考の論理-科学的様式」を自然科学の実践に与する思考様式として、「思考の物語様式」を人文学の実践に与する思考様式として論じている。

科学は人間の意図や人間の苦境を越えて不変に留まる世界を制作しようと目論む。…他方、人文学は、主に対象を見るものの立場やスタンスによって変化する世界を扱う。科学は、対象を理解しようと試みる人々の生活世界の変化を越えて、事物や事象の不変性と結びついて「存在」する世界をつくりだそうとする…。人文学はその世界に暮らすことによって要請されることを映し出すような仕方で世界を理解しようとする。言語学の用語で言えば、文学ないし文芸批評の研究は、文脈依存性を通じて普遍性に達しようとするが、科学は文脈独立性を通じて普遍性に達しようとする。

(Bruner, 1986, p. 50)

すでに明らかにしたように、上の引用部で言われる「普遍性」という言葉は2つの異なる意味のもとに理解されなければならない。すなわち、自然科学の実践に与する「思考の論理-科学的様式」のもとでは、物事の背後に潜在する普遍の「真理 (truth)」を指示するものとして、人文学の実践に与する「思考の物語様式」のもとでは人間の生や心の有り様の理解に資する「真実味 (truth-likeness or verisimilitude)」を指示するものとして理解されなければならない

表1 Brunerの2つの思考様式

思考様式 mode	思考の論理－科学的様式 Logico-scientific mode	思考の物語様式 Narrative mode
志向	物事や現象の背後に潜在する普遍的な「真理 (truth)」の解明	人間の生や心の有り様の理解に資する「真実味 (truth-likeness)」の探究
方法	高度に形式立った証明手続きや周到な観察と実験	多様なレトリックや表現手法、物語の技巧
行為	文脈から独立に妥当される事実の説明	文脈に応じて変化する意味の解釈
所産	文脈に左右されることのない普遍的な法則、理論、モデル	人間の生や心の多種多様な有り様についての物語やドラマ、歴史

い。以上、2つの思考様式の区別とその特徴を表に整理しておこう（表1）。

では、Bruner (1985, 1986) はなぜ、このような思考様式の区別を論じなければならなかったのであろうか。その背後には当時の心理学が置かれていた学問的な背景がある。20世紀の初頭から「心の科学」としての心理学の探求は、思考の論理－科学的様式の領分として理解される傾向が強かった。この傾向は、人間の心についての探求は哲学の思弁的な方法論に基づいてではなく、自然科学の実証的な方法論に基づいて為されるべきであるとする19世紀来の学問的な信念を引き継いだものであった。思考の論理－科学的様式を優勢とするパラダイムのもとでは、入念な観察と実験に裏づけられた経験的証拠に基づいて、人間の心についての文脈独立的に普遍的な法則や理論、モデルを作り上げることが目指される。他方、人間の生や心には、自らの住まう生活世界の影響を否応なく被りながら、ときに矛盾や葛藤を抱えつつも生きているという現実がある。ここに見出されるのは、文脈依存的で個別具体的な人間の生や心の有り様である。こうした位相をリアリティをもって捉えるためには思考の論理－科学的様式とは異なる思考様式が必要になる。こうした必要性とともにBrunerが定式化したのが思考の物語様式、

すなわち詩や文学のフィールドにおいて機能している思考様式であった。誤解のないように付言しておくならば、思考の物語様式は、心理学の探求において思考の論理－科学的様式に取って代わられるべきものとして提案されたものではない。そうではなく彼が主張したのは、思考の論理－科学的様式と併存しつつ、人間の生や心のより深い理解に資するものとして、思考の物語様式に根ざした探求を心理学にも取り入れるべきである、ということであった。

Brunerはこのような心理学の探求を、「解釈」という方法に基づきつつ、人間の生や心の多様な有り様を、それらが置かれた「文脈」に応じて変化する「意味」の理解の実践として構想した (Bruner, 1990; 横山, 2019)。この構想は、人間科学の探求に「物語 (narrative)」の方法論を取り込もうとしていた複数の構想と呼応し、1980年代を通じて「物語への転回 (narrative turn)」と呼ばれる学際的思潮につながることとなった (Mitchell, 1981; Polkinghorne, 1988; Sarbin, 1986; 横山, 2019)。

ただ、以上の学説史をたどるだけでは、心理学の分野において思考の論理－科学的様式に依拠した探究から、思考の物語様式に依拠した探究へのパラダイム転換が起こったとの誤解を招きかねない。むしろ、思考の物語様式に依拠し

た心理学の探究を支持する立場からは、このような学説史の読み方も可能であろう。だが、先にも述べたように Bruner (1985, 1986) による思考の物語様式は、思考の論理-科学的様式のオルタナティブとして提案されたものではなく、思考の論理-科学的様式と並存しつつ、人間の生や心のより深い理解に資するものとして定式化されたものであった。このように理解するならば、いずれか一方の思考様式の利用に固執する、という態度決定を為さない限りにおいて問題となることは、2つの思考様式を異なるものとして理解しつつも、それぞれをいかに相補的に活用していくか、ということになる。実際、Bruner も次のように述べているのである。

私に主張し得ることは、2つの視座から同時に見ることで、立体鏡を使って見るように、物事をより深く理解することができるだろうということである。

(Bruner, 1986, p. 10)

だが、残念ながら上の引用部で述べられている2つの視座から同時に見る、その具体的な仕方についての示唆を Bruner (1985, 1986) のテキストから得ることはできない。というのも、彼の議論は2つの思考様式の区別、とりわけ「思考の物語様式」の定式化というところに留まっているからである。そこで以下では、同様の問題関心から、異なる思考様式に基づいた探究の建設的な組み合わせを試論した論考を取り上げ、2つの視座から同時に見る、ということについての具体的な示唆を得ることにしたい。この目的に照らして以下で取り上げるのは、見田宗介 (1965) によって書かれた「数量的データと『質的』なデータ」と題された論考である。

3. 数量的データと「質的」なデータ

「数量的データと『質的』なデータ」は、1965年に刊行された見田宗介の『現代日本の精神構造』(見田, 1965) に収められた論考の1つである。ここでは Bruner の「2つの思考様式」(Bruner, 1985) の論考との発表年代上の位置関係の確認に留め、以下、本稿においては『定本 見田宗介著作集Ⅷ』(見田, 2012) に再録された同論考のテキストに基づいて議論をすすめることとする。見田 (2012) は同論考の冒頭において、人々の社会意識を対象とした研究には「数量的」なデータに基づいた探究と「質的」なデータに基づいた探究との2種類があることを指摘した上で次のように述べる。

この2つのゆき方について、直感的にふつういわれていることは、前者がとすれば、「たしかだが、おもしろくない」分析に終るのに対し、後者がとすれば、「おもしろいが、たしからしさがない」立論になりがちだということである。

(見田, 2012, p. 136)

上の引用部で言われている「おもしろさ」は、我々が日常的に使う意味でのおもしろさとは若干異なるため留意が必要である。この点についての補足は後に回すこととし、ここでは見田 (2012) が「数量的」なデータに基づいた探究と「質的」なデータに基づいた探究とを区別し、それぞれの評価基準に「たしかさ」が求められることに言及している点に注目しておきたい。視点の取り方こそ異なるものの、ここでの見田の区別は Bruner (1985, 1986) が「思考の論理-科学的様式」に基づいた探究と「思考の物語様式」に基づいた探究とを区別し、それぞれの

評価基準に「真理」についての別様の考え方がありとした議論に通じると言えよう。

このことは先に留めおいた「おもしろさ」についての議論をたどることによってよりはっきりとしてくる。見田（2012）は数量的なデータに基づいた探究がおもしろみに欠けると感じられるその背後には三重の抽象性があると指摘する。第1の抽象性は追体験的な了解可能性の希薄さ、第2の抽象性は総合的・多次元的な把握の困難さ、第3の抽象性は変化のプロセスや可能性に関する動的な把握の困難さ、である（見田, 2012, p. 137）。第1の抽象性は、数量的に提示された特定の現象に関するデータからは、現象の具体が体験的に把握しにくいという点に関わっている。第2の抽象性は、数値に一元化されたデータは、特定の現象に関わっている多種多様な要因について複数の次元から吟味する試みに制限を加えているという点に関わっている。第3の抽象性は、数量的なデータは、特定の現象の変化のダイナミズムを連続的な流れのうちに捉えることには向いていないという点に関わっている。

これに対し質的なデータは、特定の現象に関わっている多種多様な要因について複数の次元から吟味することを可能とし、当の現象の変化のダイナミズムを連続的な流れのうちに体験的な了解可能性をともなって提示することができる。だが、質的なデータにも弱点がある。見田（2012）はこの弱点の最たるものとして次の2点をあげている。1点目は、質的なデータはデータの「代表性」についての保証がないために、普遍的な法則を導き出すことが困難であると考えられていることである。2点目は、質的なデータについてはデータを分析するための統一的で標準化された手続きが十分に確立していないために、データの分析や解釈が恣意的、主観的に

為されているとの懸念が寄せられ、その結果として客観性、一般性についての疑念が絶えずつきまとうということである（見田, 2012, pp. 137-138）。

以上に明らかにしたように、見田（2012）は数量的なデータと質的なデータにはそれぞれに強みと弱みとがあり、それぞれに対照を成す性格を持っていることを指摘している。そして、研究者においても自身の探究において数量的なデータの分析を好むものと、質的なデータの分析を好むものがあることに言及している。だが、こうした動向に対して見田は以下のような忠言を加える。

一方が他方の分析の「恣意性」や「主観性」を責め、他方が一方の分析の「平板さ」や「無味乾燥性」を嘲笑することによって相互に足をすくひ合い、水をさし合うことから、何ものも生まれてこない。このことは無論、それぞれの立場への安住を許容することではない。2つのタイプのデータの利点をどのように統合するか、確実に、しかも深みのある分析はいかにして可能だろうか、問題はこのように立てられなければならない。

（見田, 2012, pp. 138-139）

以上の見田の忠言は、研究のデータや分析の扱いにおいて「質的（Qualitative）」な研究と「量的（Quantitative）」な研究とを対立的に位置づけて理解しようとする言説や、研究成果の評価に際して一方の評価基準を他方の評価基準にそのまま適用しようとして研究の真価を見誤ったりするような事例の今日的な状況に対しても同様に響く。

また、Bruner が「2つの思考様式」を区別

した上で主張しようとしたことも、まさにここで見田が述べた趣旨のもとでのことであった。だが、先にも述べたように Bruner は 2 つの思考様式に基づいた探究をどのように組み合わせるか、という点についてまでは議論を進めなかった。このことは、ともすれば見田が上の引用部で指摘するそれぞれの立場への安住を許容することにもつながりかねない。したがって議論を先に進めるためには、異なる思考様式に基づいた探究をどのように建設的に組み合わせるか、という問いに臨まなければならないだろう。この問いに対する見田の提案は次のようなものであった。

重要なことは、「質的」なデータはまさに「質的」なデータとしての、「数量的」なデータはまさに「数量的」なデータとしての、それぞれに固有の持ち味ないし利点を最大限に活かせるような仕方の結合、いいかえれば多段式の分析であろう。

(見田, 2012, p. 142)

見田 (2012) は上の引用部で言われる「多段式の分析」には 2 つの方向があり、さらにその先にこの 2 つの方向の組み合わせという展望が描けるとしている。以下、見田の言う多段式の分析について確認していこう。多段式の分析の 1 つ目の方向は、質的なデータの解釈や分析を通して得られた特定の現象についての仮説を、数量的なデータを用いて検証していく方向である。言い換えれば、質的なデータを仮説生成のための道具として用い、数量的なデータを仮説検証のための道具として用いるという組み合わせ方である。多段式の分析の 2 つ目の方向は、数量的なデータの分析を通して見出された特定の現象についての統計的な関連や相関を、質的

なデータを用いて意味づけていく方向である。言い換えれば、数量的なデータを問題発見のための道具として用い、質的なデータを問題理解のための道具として用いるという組み合わせ方である。見田 (2012) は、質的なデータと数量的なデータの分析に関わる以上の 2 つの結合方法をさらに組み合わせることによって、多段式の分析の精度をもう一段上げることができるとする。

見田の提案は次のようになる。まず、数量的なデータの分析に基づいて特定の現象についての統計的な関連や相関を見出す。見田はこのフェーズを「経験的な共変関係の発見」(見田, 2012, p. 143) と呼ぶ。言わば、数量的なデータのうちに特定の現象に関わる複数の要因間の因果的な関連や影響関係を見つけ出すフェーズである。だが、統計的な関連や相関が明らかになったとしても、そこに含まれている具体的な影響関係の内実や因果関係の方向、数値の実際的な意味については、数量的なデータの分析のみからは引き出せない部分もある。そこで必要となるのが、質的なデータに基づいて統計的な分析から導かれた特定の現象についての具体的な影響関係の内実や因果関係の方向、数値の実際的な意味を解釈し、意味づけていく作業である。見田はこのフェーズを「実質的な仮説の形成」(見田, 2012, p. 143) と呼ぶ。要するに、数量的に示された統計的な関連や相関の具体的、体験的な意味についての理解をすすめ、特定の現象を支えている現象のメカニズムについての肉付けされた仮説を生成するフェーズである。さて、質的なデータの分析を通して導き出される仮説は、当の仮説の源泉となっている質的なデータの個別的な特性ゆえに、仮説の妥当性、代表性についての疑義を免れ得ないだろう。したがって、質的なデータを用いて肉付けされ、

意味づけられた仮説は、今一度数量的なデータによって検証される必要が出てくる。見田はこのフェーズを「法則の確定」(見田, 2012, p. 143)と呼ぶ。すなわち、質的なデータの解釈と分析を通して豊かな意味を与えられた仮説が、特定の現象についての普遍的な法則と結びついている、あるいは普遍的な法則を内在しているということを検証するフェーズである。

さて、以上に明らかにしたように、見田(2012)は数量的なデータの分析と質的なデータの分析とを組み合わせた多段式の分析は、(1) 数量的なデータの分析に基づいた経験的な共変関係の発見、(2) 質的なデータの分析に基づいた実質的な仮説の形成、(3) 数量的なデータに基づいた仮説の検証と法則の確定、という3つのフェーズで結合されることによってその精度をあげることができるとした。だが、この組み合わせに基づいた探究は、見田自身も述べるように実際に行おうとすると非常に困難をとまなう。この困難の最たるは、数量的なデータの分析と質的なデータの分析との結合部分、結び目の部分に生じる。より具体的に述べるならばこの困難は、数量的なデータの分析を通して導かれた「経験的な共変関係」に具体的で現実的な意味を与えるために採用される質的なデータは、当の経験的な共変関係にレリヴァントな真に関係のあるデータでなければならず、他方、質的なデータの分析を通して導かれた「実質的な仮説」を検証するために採用される数量的なデータもまた、当の仮説を検証する仮説に対して真にレリヴァントなデータでなければならず、ということに関わっている。だが、個別具体的な事例と統計的な相関や一般的な法則との間の整合を追求する作業はそう容易なものではない。したがって、数量的なデータの分析と質的なデータの分析との結び目の接合度の

精査は、多段式の分析の最も困難な方法論上の課題となる。だが、それでもなお見田は次のように述べる。

社会科学者の任務は、一般的法則や理論体系を確立することと共に、そのような法則や理論体系を個別的な事例に適用し、現実の具体的な分析の用具として活用することであろう。「普遍的」な方向と「個別化的」な方向とは科学の2つの分野において、べつべつに追求されるべきものではなくて、「普遍的」な法則は、「個別的」な事例の説明と理解を助け、そのことによってまた逆に、「普遍的」な法則自体がきたえあげられていくものであろう。

(見田, 2012, pp. 148-149)

上の引用部で見田が述べていることは、一般的法則や理論体系というものは、ひとたび確立されたらそれで終いというのではなく、当の一般的法則や理論体系の妥当性を個別具体的な事例の分析に適用してみることを通して絶えず精査していく必要があるということである。ひるがえって個別具体的な事例は、一般的法則や理論体系の射程を推し測り、その妥当性を精査するための試金石として機能する。見田(2012)は普遍性への志向と個別具体性への志向とは人間科学の探求において別個の領域において追求されるべきものではなく、普遍性に根ざした法則や理論は個別的事例の理解や説明をすすめるための道具として機能し、個別具体性に根ざした現実のさまざまな事例は、法則や理論の精度を上げていくための試金石として機能するという相補的な関係にあると主張する。改めて付言しておくならば、Bruner(1985, 1986)が人間科学の探究における思考様式を「思考の論理

「科学的様式」と「思考の物語様式」の2つに区別し、2つの思考様式の二者択一ではなく、2つの思考様式の相補的な関係を論じたのもまさにこの趣旨においてであった。

4. 2つの思考様式の射程

本稿の目的は「質的 (Qualitative)」な研究と「量的 (Quantitative)」な研究とを対立的に位置づけて理解しようとする言説や、研究成果の評価に際して一方の評価基準を他方の評価基準にそのまま適用しようとして研究の真価を見誤ったりするような事例の今日的な状況に対し、Bruner の「2つの思考様式」(Bruner, 1985, 1986) の論考を足掛かりとしながら、思考様式の違いに留意しつつも物事の深い理解に至るために双方を相補的に活用していくための方法論について検討を行うことにあった。

本稿ではまず Bruner (1985, 1986) の「2つの思考様式」の内実を明らかにした。Bruner に基づけば2つの思考様式の一方、「思考の論理-科学的様式」は高度に形式立った証明手続きや周到な観察と実験に裏づけられた経験的証拠に基づいて、物事の背後に潜在する文脈独立的に普遍的「真理 (truth)」の解明に臨む思考様式であった。これに対し他方の思考様式、「思考の物語様式」は多様なレトリックや表現手法を駆使しつつ、文脈依存的で個別具体的な事象の「真実味 (truth-likeness or verisimilitude)」を立ち上げることを通して、人間の生や心の多種多様な有り様の理解に臨む思考様式であった。

Bruner (1985, 1986) において2つの思考様式は、対立的に位置づけたり、一方を他方に還元しようとしたりするべき関係にあるのではなく、それぞれに異なる特徴をもった思考様式としていずれも物事の理解に役立っているとされ

る。この趣旨のもとに2つの思考様式は二者択一的に用いられるべきものではなく、物事の理解に際して相補的に用いられるべきものとして位置づけられていた。だが、2つの思考様式を相補的に用いるその具体的な仕方についての示唆を Bruner (1985, 1986) のテキストから引き出すことはできなかった。彼の議論は2つの思考様式の定式化という部分に留まっていたからである。

そこで本稿では、Bruner の2つの思考様式の区別が今日の「質的 (Qualitative)」な研究と「量的 (Quantitative)」な研究をめぐる区別に通じることを確認した上で、同様の問題関心から異なる2つの思考様式に基づいた探究の建設的な組み合わせを試論した見田宗介 (1965) の論考を取り上げて検討をすすめた。ここで取り上げたのは見田による「数量的データと『質的』なデータ」(見田, 1965, 2012) と題された論考である。

この論考のなかで見田は、数量的なデータと質的なデータにはそれぞれに強みと弱みとがあり、互いに対照をなす性格を持っていることを指摘した。そして、数量的なデータには数量的なデータの強みがあり、質的なデータには質的なデータの強みがあるため、物事のより深い理解に向けて必要となるのは、それぞれに固有の強みを最大限に活かしたかたちでの2種のデータとその分析の組み合わせであるとした。見田はこのような2種のデータとその分析の組み合わせを「多段式の分析」(見田, 2012, p. 142) と呼んだ。多段式の分析には (1) 質的なデータの解釈や分析を通して得られた特定の現象についての仮説を数量的なデータを用いて検証していく方向と、(2) 数量的なデータの分析を通して見出された特定の現象についての統計的な関連や相関を質的なデータを用いて意味づけてい

く方向、という2つの向かい方がある。見田はこの2つの向かい方をさらに組み合わせることによって、より高精度の多段式の分析が可能になるとした。ここで見田が提案したのが(1) 数量的なデータの分析に基づいた経験的な共変関係の発見、(2) 質的なデータの分析に基づいた実質的な仮説の形成、(3) 数量的なデータに基づいた仮説の検証と法則の確定、という3つのフェーズをたどる分析であった(見田, 2012)。だが、多段式の分析には数量的なデータの分析と質的なデータの分析との結び目において、一方のデータとその分析が、他方のデータとその分析に対して真にレリヴァントである必要があるという実行上の困難がともなわれた。だが、それでもなお見田は「質的な探究か、量的な探究か」という二者択一に歩みをすすめるのではなく、双方の相補的な活用と探究が必要であると主張したのであった。

今日において「質的 (Qualitative)」な研究は、個性記述的なデータに定位するとの含意のもとに「定性的」な研究と呼ばれたり、一般的法則の確立よりも特定の現象についての仮説の擁立を旨とするという趣旨のもとに「仮説生成型 (hypothesis-generating study)」の研究と呼ばれたりする。他方、「量的 (Quantitative)」な研究は、数量的なデータに定位するとの含意のもとに「定量的」な研究と呼ばれたり、個別的な事象の理解よりも一般的法則の確立を旨とするという趣旨のもとに「仮説検証型 (hypothesis-testing study)」の研究と呼ばれたりする。両者は、ともすればかつて見田が苦言を呈したように、「一方が他方の分析の『恣意性』や『主観性』を責め、他方が一方の分析の『平板さ』や『無味乾燥性』を嘲笑することによって相互に足元をすくい合い、水をさし合う」(見田, 2012, p. 138) 関係にある。そしてその先にはそ

れぞれの立場への安住という態度決定もあるいは垣間みえる。だが、このような状況からは新たな展望は生まれてこない。見田に倣って述べるならば、必要なことは異なる2つの思考様式の強みをいかに建設的に組み合わせ、物事のより深い理解に向かえるか、ということであろう。Bruner (1985, 1986) の「2つの思考様式」の区別と、見田 (1965, 2012) の質的なデータの分析と数量的なデータの分析にかかる「多段式の分析」の提案は、異なる2つの思考様式を対立的に位置づけたり、それぞれの立場に安住したりするのではなく、両者を建設的に組み合わせ物事のより深い理解に向かうための有用な方法論上の示唆を提供してくれると言えよう。

文献

- Bruner, J. S. (1985). Narrative and paradigmatic modes of thought. In E. W. Eisner (Ed.), *Learning and Teaching the Ways of Knowing*, 84th Yearbook of the NSSE (pp. 97-115). Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Bruner, J. S. (1986). *Actual Minds, Possible Worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 見田宗介 (1965). 現代日本の精神構造. 東京: 弘文堂.
- 見田宗介 (2012). 数量的データと「質的」なデータ. 見田宗介 (著) 定本 見田宗介著作集Ⅷ: 社会学の主題と方法 (pp. 136-152). 東京: 岩波書店.
- Mitchell, W. J. T. (Ed.). (1981). *On narrative*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. Albany, NY: Suny Press.
- Sarbin, T. R. (Ed.). (1986). *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. Westport, CT: Praeger Publishers.
- 横山草介 (2019). ブルーナーの方法. 広島: 溪水社.